



ケアと育みの人類学

鈴木七美

民博 先端人類科学研究部

少子高齢化が進行する現代、人びとが心地よく生きていくためにどのような生活を望むのかに着目する「ウェルビーイング」の考え方が注目されている。本プロジェクトではケアを弱者にあたえる一方的な支援ではなく、人の一生に寄り添い、多様な生のありようを可能とする環境を「育む」ことについて考察を深める。

研究の節目にいつもわたしが思いおこすのは、スイスで出会ったモノの数々である。一九九九年夏、「新生殖補助技術への対応」に関する共同調査でわたしは、マジョーレ湖畔ロカルノで情報を集め歩いてきた。子育ての歴史にかかわるおもしろい展示があると友人の母親から教えられて、その日わたしは谷沿いの道を郵便バスで登り切った終点チェビオの民俗博物館を訪ねた。窓際に吊り下げられた白い細長い布を見たとき、とうとう「スワドリング swaddling」の布に出会うことができたのだと感じた。

異なるまなざし

出産の近代化過程では、子どもの誕生や生長を援助するのに相応しいのは誰なのかを巡って議論がなされてきた。専門職として登場した医者たちは、「古い不適当な習慣」を続けているとして、「産婆」「乳母」そして母親たちを批判した。そのひとつとして言及されたのが子どもをぐるぐる巻きにするスワドリングである。スワドリングは、幼子を不衛生な環境に晒しその生長を妨げると、啓蒙的な視点からさかんに非難された。

だが、一九世紀まで欧米で流通した産婆術書には、スワドリングの目的と手順が乳母に向けて丁寧な説かれている。そ

れは、子どもをネズミなどの外敵の攻撃から守り、人間らしい形を与えるために欠くべからざるケアとされていた。注目されるのは、布づくりも含めスワドリングが丹念におこなわれていたとみられることだ。前述の博物館でわたしは、窓越しに降り注ぐ陽光のおかげで、布に細かな刺繍が施されていることを確認できたのである。

子どもの生長に寄り添う

さらに興味深いのは、スワドリングは巻き上げることでも完成するのではなく、子どもの生長を確認しながら少しずつ布を外してゆく作業を伴う一連の世話だということだ。スワドリングは、子どもの誕生前から生長する過程において、傍で見守る人びとのまなざしや存在を物語っている。これに誰がどのように関わったのかを解明することができれば、子育てという次世代育成を巡る同時代の人びとの暮らしが見えてくるはずだ。

スワドリングにかかわる実践や批判は、子どもを育てるにあたって異なる見方が存在することを明快に示している。後に国際養子縁組に関する比較調査の折にスイスのローザンヌで会った研究者は、「子どもへの虐待やネグレクトを防ぐために」、各家庭を外部者がどのように訪

問し問題に対処するかについて知見を蓄積していた。この課題にもまた、子どもの存在や家庭・家族と社会の関係をどのように捉えるのかに基づいて、ケア(配慮)が目指すさまざまな方向性が交錯している。

「育み」に着目し、生の充実を考察する

機関研究プロジェクト「ケアと育みの人類学」は、問題認識や欲求に対応しようとするケアのありかたやその方向性を検討することとおして、同時代各地の状況や状況把握の特徴を明らかにすることを共同研究のひとつの目的としている。「育」という漢字は、子どもを生み出すようにしているさまを形象しており、一方、「教」の字には、幼子の未来を占う意味が籠められているとされる。そこには、

生み出される生命の行方を自らの運命と共にあるものとして見つめる人びとのまなざしを感じられる。現代の「教育」観に留まらない、次世代を育成する営みに関する「産育」研究が問い直されている。「ケアと育み」の諸相を追うことは、配慮としてのケアの実践の数々が、同時代に生きる人びとの世界観をいかに映し出しているのかを明らかにすることにより、その世界観を規定する要素を抉り出し、わたしたちの暮らす世界が広がる可能性を提示することである。このプロジェクトは、「育み」としてとらえられることの検討をとおして、人間のみならず地域環境をも念頭において、専門職とは限らない多様な人びとの、人の一生にかかわるケアの実践がどのように呼応し、生活環境を創出するのかについて考察を深めることを目指している。

こうしたテーマを念頭に成果公開のひとつとして開催した東アジア人類学会における国際パネル「日本と韓国の高齢化・変動する社会にお



産婆術書(オイカリウス・レスリン『妊婦と産婆の薔薇園』の初版(1513年))に描かれたスワドリングされた子ども。
出典: Speert, Harold, Iconographia Gyniatrica, F. A. Davis Company, 1973, p. 514 (鈴木七美『出産の歴史人類学』(新曜社)にも掲載)

こうしたテーマを念頭に成果公開のひとつとして開催した東アジア人類学会における国際パネル「日本と韓国の高齢化・変動する社会にお

けるウェルビーイングの探求——テクノロジーとモノの再文脈化」(二〇一一年八月 Chonbuk National University 韓国)では、変化のなかで生きる、「エイジング」する存在としての人びとが、生活の場や世界に位置づくこと、それを可能とする環境の弾性(resilience)について議論した。一人ひとりが「生を養う」ことにかかわるケアを出発点とし常にそこに立ち戻ることにより、唯一の場をウェルビーイングとして人びとを閉じ込めることに陥らない開発を考察することが「ケアと育みの人類学」の課題である。

機関研究 包摂と自立の人類学
「ケアと育みの人類学」
2011年4月、2014年3月
代表者: 鈴木七美
【関連研究会】
・シンポジウム
「福祉と開発の人類学」
——ひろがる包摂空間とライフコース」
2012年1月21日 国立民族学博物館
企画: 内藤直樹・山本直美・丹羽典生
・国際シンポジウム
「エイジング——多様な文化を生きて」
2012年2月25日・26日 国立民族学博物館
企画: 鈴木七美・金本伊津子・谷口陽子
・国際シンポジウム
「デザインの見点から見た社会空間の共有」
——インクルーシブデザインの可能性」
2012年3月3日・4日 国立民族学博物館
企画: 野林厚志・平井康之